



教皇様の叢

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済 © 1997 発行所 財団法人 精道教育促進協会 〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6 TEL.0797-31-3452・FAX.0797-31-3448

神の秘義につながる道

キリストにおいて友である皆さん。

香港から来られた「苦しみのボランティア」の皆さん、そしてローマ滞在中の支援に当たる「十字架の沈黙の働き手」の皆さん。大きな喜びをもって皆さんをお迎えします。苦しみに直面してもたじろがぬ皆さんの信仰と勇気を前に、ペトロの後継者である私はこの会見を特別に意義深く感じています。皆さんの自己奉獻と使徒職を激励いたします。(「苦しみのボランティア」は教会の霊的善のため自らの苦しみを捧げようとする人々による巡礼団である。)

すでにご存じのとおり、苦しみはキリストの秘義の核心に通じる道です。コロサイ人への手紙の中で、使徒パウロは書いています。「私は今、あなたたちのために受けた苦しみを喜び、キリストの体である教会のために私の体をもってキリストの苦しみの欠けた所を満たそうとする。」(1・24) 聖パウロが言おうとしているのは、十字架にかけられ、復活したキリストは特別な方法で苦しむ人々と一致している、なぜなら十字架を通して生命は死に打ち勝ち、恩寵は罪に勝ったのだから、ということなのです。キリストこそが私たちの救い主であり、誰もその贖いのみわざに何かを付け足すことはできません。しかし、キリストの体である教会の秘義を通

じて主は私たちをもご自身のいけにえの内に引き込まれ、日々自己の限界と戦う中で、苦しみには救いの意味があることに気づかせてくださいます。こうして内的な平和と共に精神的な喜びさえも手に入れることができます。(「苦しみのキリスト教的意味」26番参照) キリスト信者にとって、病氣やその他の苦痛は、あきらめて従わざるを得ないものではありません。苦しみは人間の超越性につながります。男も女も子供でさえも、苦しむ時には言わば自己を超えることができます。信仰のうちに受け入れ、担った苦しみは、自分自身と他者のための聖化の手段に変わります。苦しみは全人類の贖いの源となるのです。

香港にある「苦しみのボランティア」の本部は、祈りのうちに十字架の主との絆を深め、こうして得た神秘的活力を教会に伝え、またどんなに困難な状況をも変えることが可能な福音の力を証明してみせることによつて、地域の教会の霊的生命のために重要な役割を演じていることを私は確信しています。

四旬節は回心の時

〈灰の水曜日のミサにて〉

兄弟姉妹の皆さん。

☆ 今日灰の水曜日、教会が復活祭のための準備期間として定めた四旬節の始まりです。それは典礼暦年の中でも、キリスト信者の霊的生活にとつても、根本的な重要性を持つています。大聖レオは、「四旬節を聖なる仕方でも過ごせば過ごすほど、主の超越しを深い信仰で迎えることができる」(説教XII, 2番)と言っています。

聖パウロはローマ人への手紙の中でこの内的戦いを次のように描いています。「私は自分のしていることがわからない。私は自分の望むことをせず、むしろ自分の憎むことをするからである。…善を望むことは私の内にあるが、それを行なうことは私の内にはないからである。私は自分の望む善をせず、むしろ望まぬ悪をしているのだから。」(7・15、18、19) これは誰もが経験することです。贖い主であるキリストだけが私たちを敗北から救いだし、使徒自身がエフェソへの手紙で書いた勝利の武器を与えてくださいます。

このように四旬節は永遠の真理と、まことのキリスト教的回心に向けた堅い決意について、深く黙想する時です。イエズスの贖いの死と復活を記念するた

(…) 憂き人の慰めである聖マリアが皆さんと共にいてくださいますよう。力と平和を与えるしるしとして、皆さんに私からの使徒の祝福を送ります。(九六・五・三三)

「神の武具をすべてつけよ。悪の日に抵抗し、全てを果たしたのちなお立つためである。」(6・13)

四旬節は生活を振り返る時

☆ 聖パウロが書いたことはすべて、日々の経験で実証されています。最近のニュースにあつたいくつかの悲しむべき出来事も、注意深く黙想する材料となります。それらは人間の内的決定の結果ですが、それぞれの良い奥底で起こる善と悪の戦いから生じ、人間関係にも現われてきます。善も悪も「伝染する」のです。それらは増え、広がり、「善の構造」や「罪の構造」を作りだして人間生活に影響を及ぼします。このような「構造」にも、たゆまぬ注意の目を向けなければなりません。とは言え、全ては心から始まります。心はとりわけ「改心」の生じる場所であり、祈りと断食と悔い改めの時である四旬節に、私たちは改心を求められているのです。

☆ 四旬節に、信者はイエズスの警告を真剣に受けとめるべきです。「狭い門から入れ。滅びに行く道は広く大きく、そこを通る人は多い。」(マテオ7・13)

イエズスの言う「広い門」や

「大きな道」とは何でしょう？ その門とは道徳的な自主性であり、道とは知的自尊心です。何と多くの人が、キリスト信者でさえも、無関心に生き、世のなかに染まり、罪のいざないにおちいつて行くことでしょうか！ 四旬節は自らの生き方を振り返り、新たな心で秘跡にあずかり、悔悛を決意し、イエズスが教えたように進んで狭い門から入り、永遠の生命に至る細い道を歩む(マテオ7・14参照)ための好機です。

これはキリスト信者の家庭にとっても同じです。公会議は家庭を小さな教会、「家庭教会」(教会憲章11番)と呼びました。家庭も教会共同体と歩調を合わせ、祈りの時を持ち、神の言葉を聞き、交わりを深め、兄弟姉妹への寛大な愛のわざを行なうことよって復活祭に備えるよう、勧められています。このようなわけで私は全ての家庭に当って手紙を書くことにしたのでした。(「家庭への手紙」)この手紙が多くの家庭に役立つことを願っています。(…)

皆さん、四旬節は、私たちがご自分の秘義にあずからせようとするイエズスの呼びかけをさらにはつきりと聞くことのできる時、聖週間と復活祭に備える時です。「労苦する人、重荷を

負う人は、すべて私のもとに来るがよい。私はあなたたちを休ませよう。」(マテオ11・28) 不忠実という重荷を負ったままキリストの前に出ても、恐れることはありません。キリストは贖い主です。税吏や罪人に親切だ、同情的だと批判する人々に對してキリストはお答えになりました。「医者が要るのは健康な人ではなく病人である。私に来たのは、義人を招くためではなく罪人を招くためである。」(マテオ9・12・13) 神は全ての人が救われることをお望みです。有名な放蕩息子や迷った羊、失ったドラクマなどのたとえ話は、まさしく神がいつでも赦してくださいさる方である

ことを教えるためのものです。人類史上、罪がどれほど邪悪であつても、それは変わりません。「一人の罪人が悔い改めれば、悔い改めの必要のない九十人の義人の時よりも天ではいつそうの喜びがある。」(ルカ15・7) 神の無限の憐れみは、悪を克服します。この憐れみ深い愛を前にして、悔悛と生活を改める熱望とを心に目覚めさせなければなりません。

教会の必要のために祈ろう

☆ この四旬節の間、聖母マリアが私たちと共にいて助けてくださいように。ファティマで聖母の出現を見

た幼いジャンシントは言いました。「マリア様の無原罪の御心がとても好きです。天国のお母様の御心なのですから！」四旬節に当たり、子供としての信頼を込めて聖なるマリアに呼びかけましょう。罪におちいった人、真理から離れている人の改心のために祈りましょう。教会の必要のため、司祭の召命のため、司祭たちの堅忍と聖性のため、全ての家庭のために、祈りましょう！

荒れ野にも

神はおられる

ここでこうして皆さんにごあいさつできることを光栄に思います。今日、皆さんにお会いする機会を持たれたことを感謝します。(…)

とでも有名です。泉のシンボルは興味深いだけでなく、今も付近の人々やこの「泉の聖母の教会」を訪れる多くの人の心の中で実を結んでいます。

本日、四旬節第一日曜の典礼は、歴史的に見てもとても豊かな伝統を持つこの教会にふさわしいものがあります。私たちは荒れ野でキリストと出会います。ヨルダン川で洗礼を受けた後、キリストは荒れ野に引きこもり、四十日四十夜の間、断食を続けながら御父とただ二人で過ごすことを選びました。断食し、祈りつつ、救い主としての使命を果たすために備えていたのです。四十日目、あたたかも使命の終わりに起こることを予感するように、キリストは試みに身をゆだねました。

本日の典礼で福音史家マルコはキリストの試みについて語

り、三つの誘惑を受けられたことを思い起こさせています。マルコの語り口はいつもの通り簡潔ですが、マテオはもつと詳しく述べています。試みの一部始終がこと細かに語られているので、私たちにもそれが自分自身の原罪から生じた三つの欲に呼応していることがわかります。

こうしてキリストは、ヨルダン川の岸にひしめく罪人たちとご自分を結び付けました。試みの時、キリストが荒野で宣言した言葉は、罪の根源を明らかにしています。罪は誘惑から、三つの欲から生じます。すなわち肉の欲、目の欲、生活のおごりと呼ばれる誤った自尊心です。キリストは誘惑する者と出会い、打ち勝ちました。それは後の救い主の使命の勝利を思わせます。

マリアは旅路にある私たちを
二気づけてくれる

四旬節の始まりに当たって
この秘義について思いを
巡らせるのは有益なことです。

なぜなら四旬節こそは私たちが聖週間へ、聖なる三日間、復活祭へと導くからです。復活祭にはキリストの秘義の全てを見出すことができます。受難も、贖いの死も、生命のしるしも。本日の典礼は、モーセではな

くノアと交わされた、重要な契約について語ります。大洪水のあと、神はノアを通じて生命ある全てのものと契約を結ばれました。箱船に入って助かった人類のみならず全ての生き物、自然とさえもです。本日の典礼では、私たちは「エコロジー的」な契約について考えることができますでしょう。キリストが四十年間の四旬節の断食によってお示しになったのと同じ道をたどる勇気を得るために、心を集中

させ、思い描くべきことです。ここで手短かに、本日のみことばの典礼が語る深く豊かな意味についてまとめたいと思います。私自身をも含め、私たち全員がキリストの示した道を何度でも歩むよう励ましたいと考えています。この道は生命に通じているからです。

荒野を（旧約の選ばれた民が四十年間さまよったのも砂漠の中でした）通るこの道の途中には泉があり、水があつて、キリストの御母がその水をくださいます。それはとても意味深いことです。これら全てを考え合わせると、まことに勇気を得て、荒野の中を歩いて行き、そこで神と出会うことができます。旅の間、聖母が共にいてくださるので、荒野で悔い改めることもできるのです。泉の聖母は私たちに水をお恵みになります。

愛する皆さん、再びお願いいたします。大いなる信仰と熱意をもって、キリストの秘義にあずかることを！
（九四・二・二〇、ローマ市内の教会にて、四旬節第一日曜日のミサの時のお話。）

母性は神の創造の わざにあずかる

教会シリーズ 40

女性が社会や教会の使徒

1 職において享受する職業上の立場が何であれ、母性を通して発揮される卓越した尊厳とは比べものになりません。女性の模範であるマリアは、託身と贖いの摂理に招かれ、母性を通して使命を果たされました。

使徒的書簡「女性の尊厳と使命」（17番）で強調したように、マリアの母性は例外的に処女性と結びついていました。従って、聖母は神に処女性を捧げる女性の模範にもなられたので

す。（17番参照）奉獻生活について話す時に、主に捧げられる処女性をテーマとしたいと思います。が、今回は教会における信徒の役割について考察を続けながら、母性を通して女性の人間社会とキリスト教共同体への貢献について考えてみましょう。

母性は処女の胎内で人となつた永遠のみことばである神の母・マリアにおいて最高の価値を持つようになりました。マリアはその母性によって、託身の秘義の中心人物となったので

母性のねうち

2 現代はこれまで以上に母性を再評価しなければなりません。母性は文明の夜明けや神話の時代の古い概念ではありません。女性の役割がどんなに増え、広くなっても、女性の身体構造、固有の習慣、道徳的、宗教的、そして美的感受性までもが新しい命を生み出す能力と使命につながり、それを称揚しています。子供を作るとい

す。さらに、キリストの贖いのいけにえに結ばれて、全てのキリスト信者、全ての人の母となりました。この点でも神のご計画の中で母性は輝いています。母性はマリアにおいて最高の表現を得、全人類の母性はその輝きを反映しています。

う仕事には、男性よりも女性の方が適しています。女性は妊娠と出産によって子供と直接深く結びつき、命の発育に接し、成長の責任を担い、生活の中で喜びや悲しみや危険を子供と深く分かち合います。父の存在と責任も母の仕事と同じく重要ではありませんが、全ての人間の生命の始まりに、最も重要な役割を果たすのは女性です。その役割は、人間の本質に光を当て、心を開いて自己を与えなければなりません。現代世界憲章は「自分自身を無私無欲の気持ちで与えなければ、完全に自分自身を見い出せない」（4番）と述べています。他者に対するこのようなあり方は、三位一体の愛の本質であり、人間のあるべ

不変の教え

き姿の根源です。母性はこのような人間として、共同体としてのあり方の頂点に位置づけられています。

3 注意しなければならぬのは、不幸にも母性の価値に異議が唱えられたり、批判されたりしていることです。伝統的に母性は崇高なものとされてきましたが、そんな考え方は時代遅れであるとか、社会的迷信であるとかみなされています。

人類学と倫理学の観点から、母性は女性の人格発展に制限を加え、女性の自由や、他の活動に加わる望みを制約するものであると考える人たちもいます。従って多くの女性が、人々に奉仕したり霊的な意味で母性を發揮するためにではなく、専門の仕事に専念するためには母になることをあきらめざるを得ないと感じています。あたかも自分の身体に対する権利と同様、まだ生まれぬ子供の権利をも所有するかのよう、中絶によって子供の命を奪う権利を要求する人々さえいます。そして、母親が自分の命を失う危険性の方を選ばず、愚かである、利己主義である、社会的に時代遅れであると非難します。

このような考え方は、人間の価値を保証し、再建するキリスト教精神に打撃を与えます。

4 福音から学ぶ人間と共同体の概念に従えば、活動することによって物質的豊かさや満足を得るために母性を拒絶することとは認められません。これは本来母性のうちに開くべき女性の人格を歪めることです。

結婚の結びつきが二人の自己愛に終わってしまうことはありません。今も昔も多くの夫婦が経験し、証明しているように、互いを結ぶ愛は子供に広がり、子供に対する親の愛になります。多くの夫婦が自分たちの愛の実りのうちに強めあい、適合しあう道、時にはやり直したり改めるための道を発見します。

一方、子供はすでに命を受けた瞬間から尊重される権利を持っています。子供は母親の思うままに処理され得るものではなく、母性に伴う犠牲と共にもたらされる喜びを味わいつつ(ヨハネ16・21)、母が自分を捧げるべき人格なのです。

5 現代のような状況にあっても、女性は母性の価値に目を開くよう求められています。母性は女性の人格的尊厳への確認であり、新たな命を受け入れ、自らを捧げる能力です。神学面から見れば、それは神の創造のみわざにあずかることでもあります。(「女性の尊厳と使命」18番)子供を生むという

特別の役割によって、女性は男性以上に親しく神の創造のわざにあずかっています。この特権に気づいたエバは、「私は主のおかげで一人の子をもうけたい。」(創世の書4・1)と言いました。母性は生命伝達への貢献ですから、聖書ではエバは「生きる全ての人の母」(同3・20)と呼ばれています。この名はエバの(そして全ての母親の)うちに、イエズスが宣言された「死者の神ではなく生きる者の神」(マルコ12・27)の姿が現実のものとなったことを理解するのに役立ちます。

聖書とキリスト教の啓示が示すように、母性は人間に対する神の愛、聖書によれば母のような思いやりと憐れみを備えた愛(イザヤ49・15、詩篇86・15)にあずかることです。

女性の存在は教会と社会の鍵

6 家庭で実現される母性に加え、すばらしい形で実践される霊的母性も多々あります。後の機会にお話しする奉獻生活だけでなく至る所で、孤児や病気に苦しむ子供、見捨てられた子供たち、貧しく恵まれない人々のために、キリストの愛

の精神に励まされて母のように献身的に働く女性たちを目にします。そこでは、現代社会を人間化するという教会の司牧的務めの基本原則がみごとに果たされています。まことに「女性は母性の特別の体験によって、命の基本的な価値を伴った始めから、人間のために、また人間の真の善のために、特別な感受性を持っていきます。」(「信徒の召命と使命」51番)従って、女性性は教会と社会の中で「鍵となる存在」であると明言しても少しも大げさではないでしょう。(九四・七・二〇)

とを感謝します。」
12・13 アルメニアのカレキンを迎えて。「このような集まりが今後も繰り返されて、本当の対話と共同の仕事に発展しますように。二〇〇〇年を迎えて、福音宣教の仕事に一致することができそうです。」
12・15 お告げの祈りで。「キリストは光です。神であるキリストにおいて、父のみ顔を見せてくださる。同じ人間であり、罪以外私たちと同じになっただけだったから。人間自身に人間のことをお教えになる。」
1・1 世界平和の日のメッセージ。「赦しを与え、平和を受けなさい。」

11・30 医療関係者へ。「精神障害者と言えども神の似姿であり、そのように扱われねばなりません。キリストは精神障害をも含め、全ての人間の苦しみを引き受けられたのです。」
12・3 中国のカトリック信者へのメッセージ。「どんなに困難な時も、皆さんの信仰が衰えることはありませんでした。キリストの弟子・祖国の忠実な市民として常に真理の証人となり、ベトリ口の後継者との効果的な一致を保ってください。」
12・5 英国国教会のカンタベリー大司教を迎えて。「国教

教皇さまの動き

会とカトリック教会は不幸にも分裂していましたが、唯一の主のもとに兄弟姉妹です。私たちに課せられているのは互いの絆を強め、キリストが望まれる完全な一致に至ることです。」

12・8 聖母の無原罪の祝日に、ローマ市内の広場で聖母の円柱の前に祈られた。「私たちと共にあって主のわざを思い起こさせ、全ての悪に打ち勝つため戦うよう励ましてくださることを感謝します。」

「教皇様の声」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講義等を解説しながら、そのまま伝える月刊紙。毎月1日発行。定価 一部百八十円(送料別)。一年予約 送料とも、一〇五〇円から。詳しくは精進教育促進協会まで。

郵便振替 01130-8-72393